



本県の黒毛和種肥育において、肥育前期に濃厚飼料の給与量を制限し、良質粗飼料を多給することで飼料の利用効率を高め、良好な発育と枝肉成績を得る「長崎型新肥育技術」の普及が進んでいます。一方、生産現場では、肥育前期に粗飼料を十分量摂取できない事例も散見されています。

これは、体重が重視される子牛市場に対応するため、出荷前の子牛に濃厚飼料が多給される傾向にあることが要因の一つと考えられます。そこで、離乳後の去勢子牛を用いて、濃厚飼料を育成前期（90～179日齢）に多給し、後期（180～269日齢）に

制限する給与方法が、粗飼料摂取量と発育に及ぼす影響を検討しました。その結果、後期の粗飼料摂取量が増加し、育成期間中の

子牛の育成技術

濃厚飼料の多給時期粗飼料摂取量に影響

育成後期の粗飼料摂取量と日増体量および胸腹差

区分	育成後期の粗飼料摂取量 (原物kg/日)			日増体量 (kg/日)	胸腹差 (cm)
	180-209日齢	210-239日齢	240-269日齢		
慣行区 ¹⁾	3.1±0.2	3.5±0.2	3.9±0.3	1.12	35.7
育成前期多給区 ²⁾	3.0±0.7	4.1±0.7	4.8±0.8	1.21	40.7

1) 慣行区：濃厚飼料を月齢に応じて増給し、8カ月齢で5kg/日を給与する区
 2) 育成前期多給区：濃厚飼料を5カ月齢をピーク（4.5kg/日目安）として増給し、その後漸減して7カ月齢以降は4kg/日に制限する区

日増体量は大きく、胸腹差は拡大する傾向にありました。本研究成果は、「長崎型新肥育技術」にスムーズに移行できる子牛の育成技術として、肥育経営、繁殖経営双方の所
 得向上につながるものと考え
 ておりますので、ご活用くだ
 さい。
 （長崎県農林技術開発セン
 ター畜産研究部門大家畜研究
 室主任研究員 上野健）